

松江市文化財調査報告書 第126集

都市計画道路穴道中央線道路改良事業に伴う
能登堀遺跡発掘調査報告書

2009年8月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

都市計画道路穴道中央線道路改良事業に伴う
能登堀遺跡発掘調査報告書

2009年8月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は、松江市教育委員会および財団法人松江市教育文化振興事業団が平成19年から平成20年に実施した、「都市計画道路宍道中央線道路改良事業に伴う能登掘遺跡発掘調査」の報告書である。

2. 本書は、松江市（土木課）から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。

3. 発掘調査の組織は以下のとおりである。

調査主体者　松江市教育委員会

事務局　教育長　福島　律子
理　事　友森　勉
文化財課長　吉岡　弘行
調査係長　飯塚　康行

実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団
理　事　長　松浦　正敬
事務局長　松浦　克司
埋蔵文化財課長　広江　眞二
課長補佐　錦織　慶樹

調査者　平成19年度（現地調査）

副主任　徳永　隆

調査補助員　永田　正人

平成20年度（現地調査）

主任　幹　中尾　秀信

調査補助員　徳永　桃代

平成21年度（報告書作成）

主任　幹　中尾　秀信

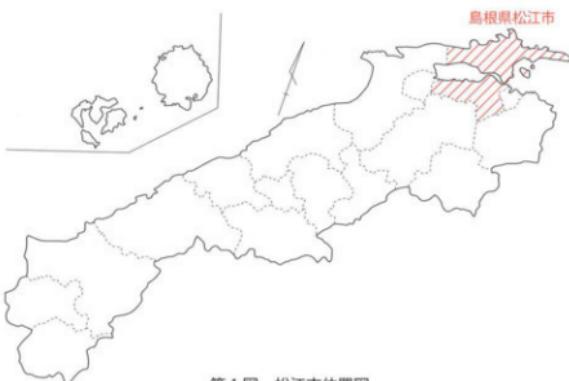
調査補助員　宇津　直樹

4. 地形のあり方については、島根大学准教授酒井哲也氏にご教示いただいた。また、宍道支所地域振興課の五百川秀男氏、松本真由美氏にご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

5. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。
6. 出土遺物は、松江市教育委員会文化財課で保管している。
7. 遺物の整理、実測及び浄書は、徳永（桃）、宇津が行い、遺物の撮影及び本書の執筆・編集は中尾が行った。

--- 目 次 ---

I 調査に至る経緯	1
II 位置と歴史的環境	1
III 平成19年度調査	4
IV 平成20年度調査	19
V 小 結	29



第1図 松州市位置図

I. 調査に至る経緯

平成19年2月、かねてから計画のあった「都市計画道路穴道中央線道路改良事業」の工事予定地のうちの3箇所について、松江市教育委員会において埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施したところ、3箇所すべてから須恵器片等が出土し、またピットなどの遺構も認められた。

これらの遺構や遺物は、穴道町遺跡地図（1993年刊）に能登堀遺跡（遺跡番号169）として記載のある遺跡に隣接していたので、この遺跡の範囲が広がっているものと考えられた。

よって、道路改良事業の予定地内に当たる遺跡の範囲内で、発掘調査を実施して遺構の検出と遺物採取を行ない、能登堀遺跡の詳細を明らかにすることになったものである。

平成19年度は、前述する2月に行った試掘調査の結果に基づいて、同年9月1日から～12月28日まで、幅8m、長さ50mの道路改良工事予定地内の約570m²を調査した結果、土師器・須恵器・陶磁器・木製品・石製品・石硯等が出土した。

松江市教育委員会では、遺跡の広がりを確認するため、翌平成20年7月に、前年度調査地の南西の隣接地4箇所で、再度、試掘調査を行ったところ、うち西側の2箇所で須恵器を含む遺物を多数検出した。このため、同年12月から引き続き南西側の道路改良事業予定地内の発掘調査を実施したものである。

現地調査期間は平成20年12月15日～平成21年3月16日まで、調査面積は約210m²で、平均3mの深さまで掘り下げた。一部重機を使用しながら人力で掘り下げるのこととした。

II. 位置と歴史的環境

能登堀遺跡（169）は松江市穴道町に所在する。能登堀遺跡の所在する穴道地区は、松江市と合併する以前は、八束郡穴道町大字穴道にあたる場所で、能登堀遺跡は穴道町北西側の穴道湖沿い、JR穴道駅の東側付近に位置する。北側に穴道湖、東と南は大字白石（はくいし）、大字佐々布（さそう）地区と接している。佐々布地区を分ける佐々布川の河口付近には穴道要害山城跡（35）がある。穴道湖に沿うように東西に国道9号とJR山陰本線が走り、JR穴道駅はJR本次線の分岐点となっている。穴道駅を中心として、穴道郵便局、松江市役所穴道支所があり、国道54号線沿いに穴道小学校、県立松江南高等学校穴道分校、東側に穴道中学校がある。

穴道の地名の由来は、『出雲国風上記』天平5年（733）によれば、この地の南の山に大穴持命が追いかけた猪の像が二つあり、この猪を追いかけた犬の像とともに石となって残っていることから、当初は猪路（ししち）と言っていたものが、転訛して穴道（しんじ）となったようである。この風土記に、意宇郡穴道郷（おうのこほりししちのさと）と記載されている地域が現在の穴道町であり、穴道郷は大字穴道・白石・佐々布を含む範囲であったと想定される。風土記では、穴道郷のほかに穴道駅（ししちのうまや）の記載がある。



番号	名称	種別	概要
16	私塙治高良首冢	古墳	
35	天道要寄山城跡	城跡	
70	鶴音寺横穴群	横穴墓	2穴
-1	鶴音寺1号穴	整正大型平入	
-2	鶴音寺2号穴	三角形断面平入	
164	後谷横穴墓	横穴墓	
165	元葉断遺跡	散布地	須恵器片
166	山の神谷横穴墓	横穴墓	
167	岩穴口古墳	古墳	
168	打越遺跡	散布地	須恵器片・土師器片
169	能登御跡	散布地	須恵器片・土師器片
170	上野原遺跡	散布地	須恵器片
171	香の木遺跡	散布地	須恵器片・土師器片

番号	名称	種別	概要
172	深井遺跡	散布地	須恵器片
173	小宮田遺跡	散布地	須恵器片
174	向野原遺跡	散布地	須恵器片
175	下野原遺跡	散布地	須恵器片
176	八手久保遺跡	散布地	須恵器片
177	横町横穴墓群	横穴墓	2支群
-1	1支群		1穴
-2	II支群		1穴
178	穂町遺跡	散布地	須恵器片・土師器片
179	穴道要寄山古墳	古墳	円道
180	穂堀遺跡	散布地	須恵器片・土師器片
181	西代遺跡	散布地	須恵器片・土師器片

番号は鳥根県遺跡番号を示す

0 S=1:8000 400m

第2図 周辺の遺跡 (S=1:8000)

能登堀遺跡の周辺には、岩穴口古墳（167）、宍道要害山古墳（179）、隨音寺横穴群（70）、後谷横穴墓（164）、山の神谷横穴墓（166）、横町横穴墓群（177）がある。宍道要害山古墳は、宍道湖を望む標高42mの低丘陵上に所在する古墳だが、中世に城が築かれたため墳丘と石室の天井石は失われている。残存する石室は奥行1.1m、幅1.85m、高さ1.35mを測り、米待石の岩塊を削り抜いた特異なもので「石棺式石室」に属するものである。後谷横穴墓は、宍道中学校の西に存在する山の神谷から南東にはいる谷間に所在する。丘陵の西側斜面に開口し、水面面から1m前後の非常に低い所に位置している。玄室は奥行1.95m、幅3.25m、高さ1.55mを測る横長長方形で、家形平入である。また、元薬師遺跡（165）、打越遺跡（168）など、須恵器片や土師器片の散布地が多く発見されている。

中世の宍道町域は、宍道郷・佐々布郷・伊志見郷となっている。鎌倉時代、佐々布郷は佐々布氏が支配したが、宍道郷は武蔵国を本拠地とする東国御家人成田氏が新補地頭として支配し、伊志見郷は幕府の寄進によって杵築大社（出雲大社）領となった。

南北朝時代、佐々布郷は引き続き佐々布氏が、なお勢力を保持していたが、宍道郷では反尊氏派であった成田氏が没落し、出雲守護京極氏の一族である宍道氏が支配するところとなった。宍道氏は佐々木京極氏の一族で、宍道郷を支配したことから宍道氏を名乗ったものである。能登堀遺跡の近辺には塩治判官高良と伝えられる墓（16）が残っている。

戦国時代、宍道氏は当初は尼子氏に従ったが、のち大内氏に従ったので、いったんは出雲を追われた。しかし、毛利氏の進出とともに旧領を回復し、この時、居城の金山（坂口）要害山城の整備・拡充と合わせて、宍道要害山城跡（35）・佐々布要害山城をはじめとする支城を整備して勢力を堅固なものとした。

しかし、この後、毛利氏が豊臣政権を背景とした惣国検地を実施した際に、古い出雲の国人層のほとんどが知行替えとなり、宍道氏も天正19（1591）年に長門国に転封となり、宍道は毛利氏家臣吉川氏の所領となっている。伊志見郷も杵築大社領から没収され意宇郡に加えられた。

江戸時代になると、一帯は松江松平藩領となり、宍道村・白石村・佐々布村・伊志見村となる。宍道村は、大原・仁多・飯石の雲南三郡からの年貢米・鉄・同三郡への塩をはじめとする物資の集散地となり、宍道湖を通じて松江城下や各地への水運も発達した。宝曆年間（1751～1764）の検地によれば、宍道村390石、白石村1230石、佐々布村840石、伊志見村240石となっているが、明治初年の『旧高旧領取調帳』によれば、宍道村（松平出羽守領分）407石、白石村（松平出羽守領分）1344石、佐々布村（松平出羽守領分）1021石、伊志見村（松平出羽守領分）280石となっている。

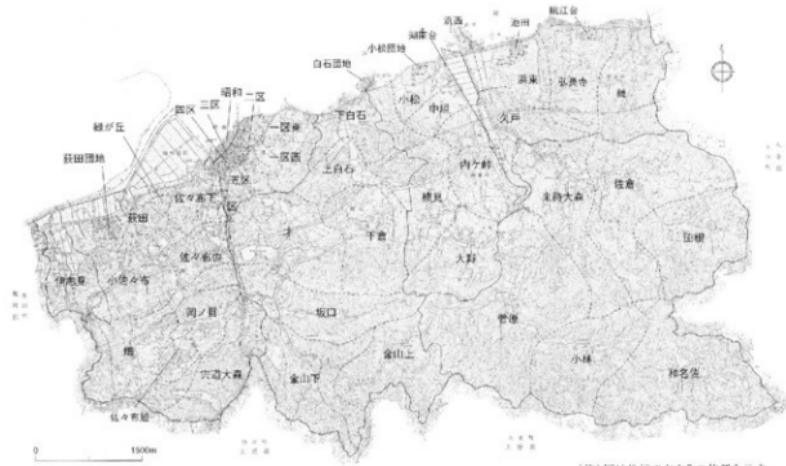
明治22年（1889）4月、宍道村・佐々布村・伊志見村・白石村が合併して、意宇郡宍道村となつた。明治29年（1896）には意宇・島根・秋鹿郡をあわせて八束郡が成立し、八束郡宍道村となつた。

この頃の宍道は、明治22年に八束郡内最大の製糸工場となる佐藤製糸場が操業、明治42年（1909）には山陰線が宍道まで開通したほか、大正5年（1916）には宍道・本次間で篠上鉄道が営業を開始し、これに江戸時代から続く宍道湖の水運の良さも加わって、地域の産業と交通・運輸の拠点となつていったのである。

昭和2年(1927)宍道村は町制施行によって「宍道町」となった。昭和30年(1955)、東接する来侍村と合併、平成17年(2005)3月、近隣の1市5町1村が合併して、現行の松江市宍道町となつたが、宍道・白石・佐々木・伊志見の各大字は宍道町の大字として今も存続している。

参考文献

- ・『宍道町史』宍道町（2001）
 - ・『八束郡誌』（復刻版）（1986）
 - ・『宍道町歴史史料集（古墳時代編Ⅰ）』宍道町教育委員会（1993）
 - ・『角川日本地名大辞典』（1979）
 - ・『宍道町遺跡地図』宍道町教育委員会（1993）
 - ・加藤義成『校本出雲国風土記』（1968）
 - ・木村礎『旧高旧領取調帳中・四国編』（1978）



第3図 宅道の地区名

III. 平成19年度調査

調査は、まず、耕作土及び試掘調査で確認されている無遺物層を重機により取り除き、以下は人力により掘り下げ、遺構の検出、遺物の採取等を行った。

調査区は、土層観察用の畦を長軸方向に1本、短軸方向に2本（ABセクション、CDセクション）設定し、手手に区切られた区画をそれぞれ東側から1区（南側）、2区（北側）、中央を3区、西側

を4区とした。

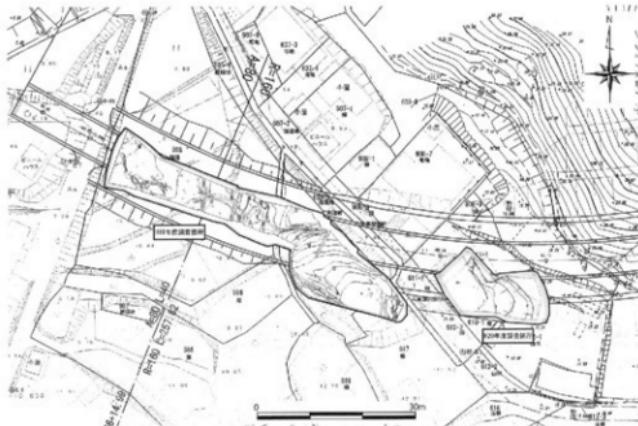
しかし掘削を進めるにつれ、長軸方向の壁は一部3m近い高さとなることが判り、安全面から勾配をつけるため、上層観察を断念し珪を取り外したため、1・2区、3区、4区とした。

調査地現況は、V字状に山に挟まれた、南西に向かって緩やかに傾斜する耕作地であった。調査区中央では、試掘調査時点で2m近い掘削が必要なことが判明していたため、かなりの厚さで土砂が堆積した谷間であることが予想された。しかし、標高の高い1・2区の一部は、耕作土を剥ぐとすぐに地山面が検出され、現況の緩斜面から予想した旧地形より起伏のあることが判明した。その後、地元の方々から調査地一帯はもともと棚田状の水稻耕作地であったこと、一度宅地造成を実施したが地滑りを起こし、宅地化の計画が頓挫したこと、また今は落ち着いているが現在も山が滑ってきてていること等のお話を伺った。おそらく近年の造成工事のものと思われる造成土層（C-D土層断面図第11層）も観察できたため、当調査地は東側で一部削平を、中央で1m前後の上盛りがされていると推察できた。

造成土以下は、旧耕作土と思われる粘土層（C-D土層断面図第12層）があり、それ以下も50cm程度の粘土層が厚く堆積していた。この粘土層（C-D土層断面図第13～15層）からは中世以前の遺物が多数検出され、遺物を取り上げながら的人工掘削となった。

調査地が地滑り地帯であることが判明したため、平成19年12月13日に島根大学総合理工学部地球資源環境学科の酒井哲弥准教授に調査地における地滑りの痕跡等についてご指導いただいた。

同月20日には島根県教育委員会、松江市教育委員会による指導会を実施し、中世以前のものと思われる石製硯や滑石製石鍋片が出土していること、古墳時代後期の祭祀跡の可能性のある溝状遺構内への土器廐棄状況があることなどの指摘を受けた。その後、遺構の記録、遺物の取り上げ等を実施し、現地での調査を終了している。



第4図 工事計画と調査地

調査の結果、以前から周知されていた能登堀遺跡の範囲は、この緩斜面の南側に広がる一段高い平坦部に位置する。調査地の現況の標高は、南西の低地部で約5m、山側で約10mである。以下、推測される遺構の時代ごとに概要を述べる。

1 近世以降

① 現代の造成

調査前の地形は緩やかな傾斜地に段々畑が作られていたものだったが、堀り下げの結果、地山面は東側のわずかな平坦面から西に向けて急に傾斜し、そこからもう一度傾斜が緩くなったまま調査区西端まではほぼ平坦な面で形成されていた。調査区土層断面の観察からも、土層中央付近で黄褐色の地山ブロックを多く含む造成土らしき層（AB土層25層、CD土層11層）が確認され、前述の地元の方の話と合わせて推察すると、もっとも厚いところで1m近い盛土を行い、ほとんど遺物の検出されなかった東側の平坦部を多少削平して、現況の緩斜面を作り出したものと考えられる。

② 土坑（P1、P2）

調査区東側で土坑を2基確認した。現況で土地境界にあった緩い溝の直下で検出されたもので、いずれの土坑の覆土も黒色の有機質土からなり、ガラス片を含むなど、土地境界に関する現代の土坑と推定される。西側のP1は直径約40cm円形の土坑で深さは約10cm、P2は長軸約80cm、短軸約60cmの楕円形の土坑で深さは約30cmを測る。

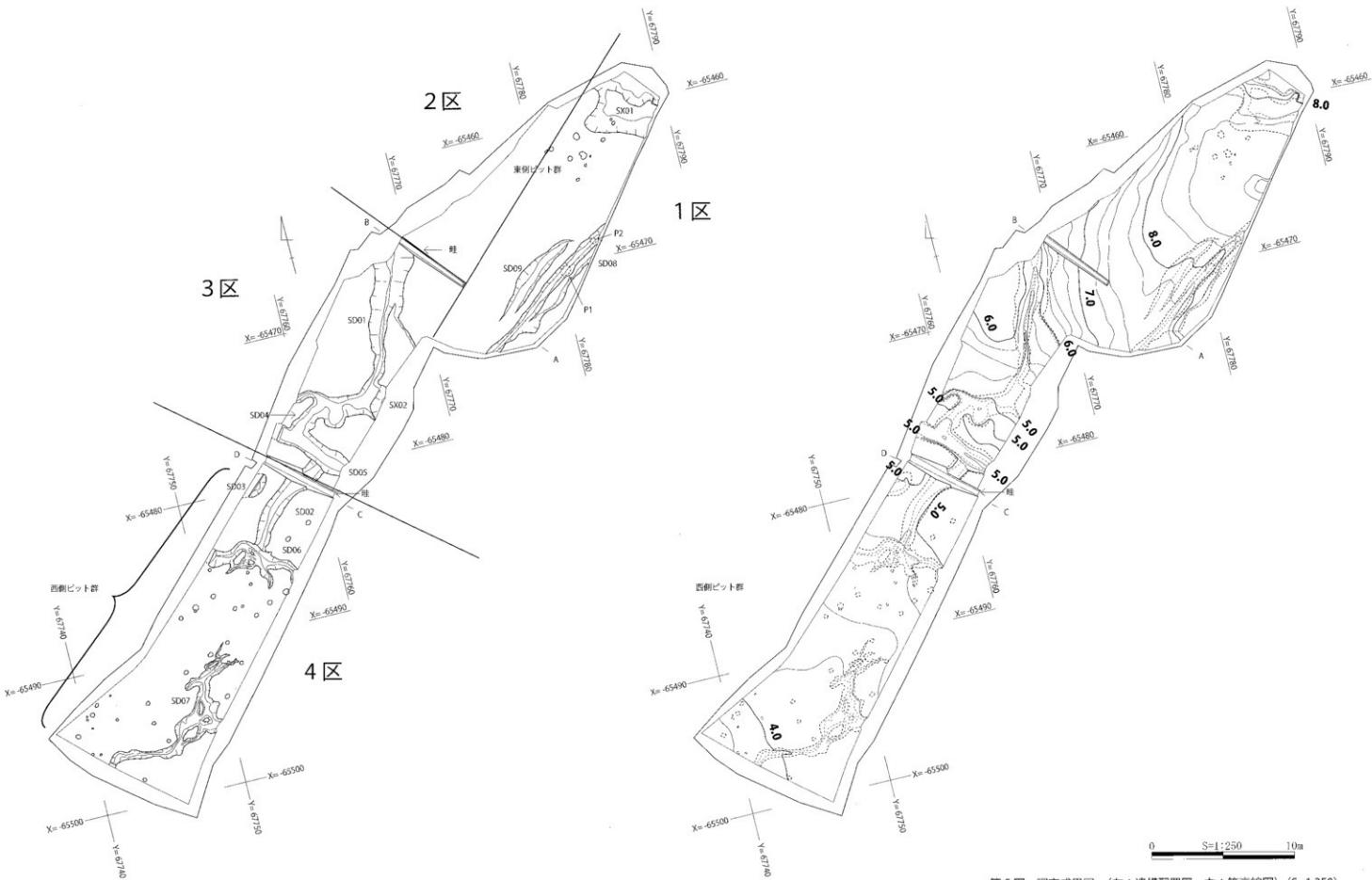
③ 溝状遺構（SD08、SD09）

調査区東側に北東から南西に向けてほぼ並行して走る溝状遺構を2条検出した。北側のSD09は、検出長約8m、深さ10cmに満たない浅い溝で、遺物は無い。南側のSD08は、検出長約12m、深さ約30cmを測り、調査区南東に広がる平坦面から落ち込む直線的な段の下端に沿って掘られている。遺物は少ないが、覆土からは近世以降のものが出土している。両溝とも造成が予想される上層レベル以上から掘り込みが確認できるものであり、また、前述の土坑同様、現況の境界溝の直下もしくはそれに並走して検出されたものであるため、近世以降の境界溝であった可能性が考えられる。

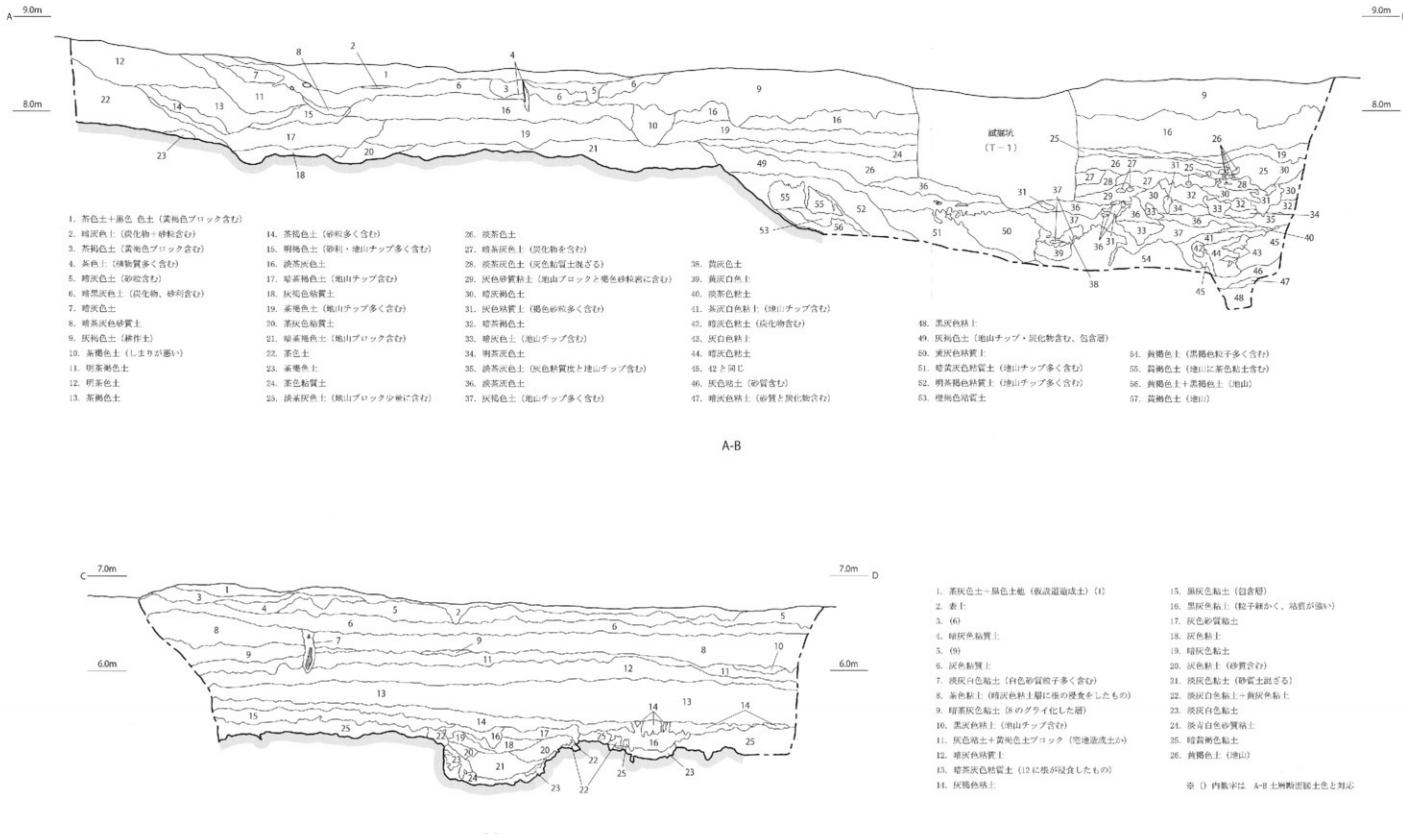
2 古代末から中世

① 包含層

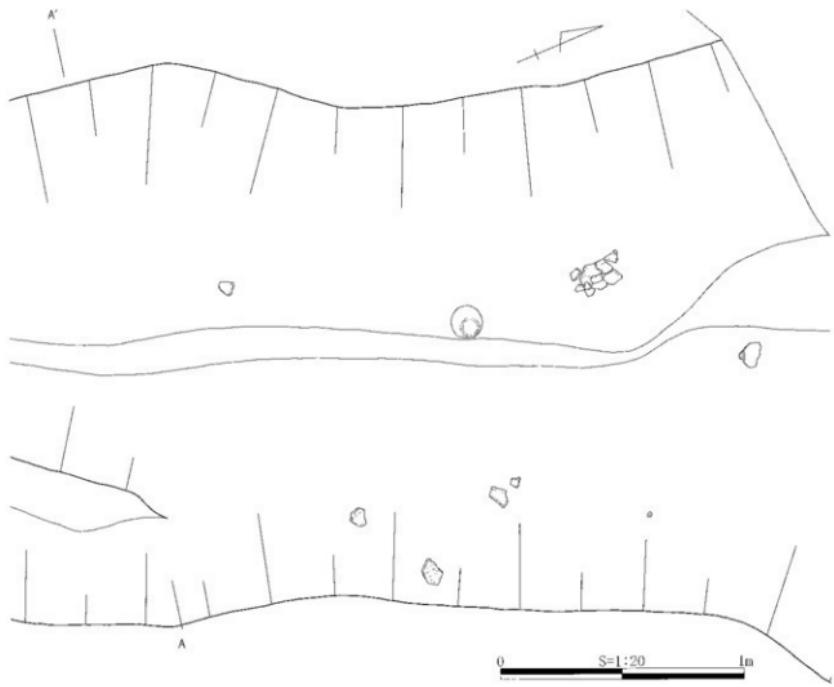
現代の造成土以下には旧耕作土と思われる粘土が堆積しており、この耕作土以下の厚い暗灰色系の粘土層（C-D土層断面図第13～15層）から多くの遺物を検出している。基本的に包含層出土遺物は小片が多く、時期の特定できるものは古代末から中世にかけての遺物であった。包含層下層では古墳時代後期の遺物が検出されるが、後述する溝状遺構内に大量に廃棄されたものと同



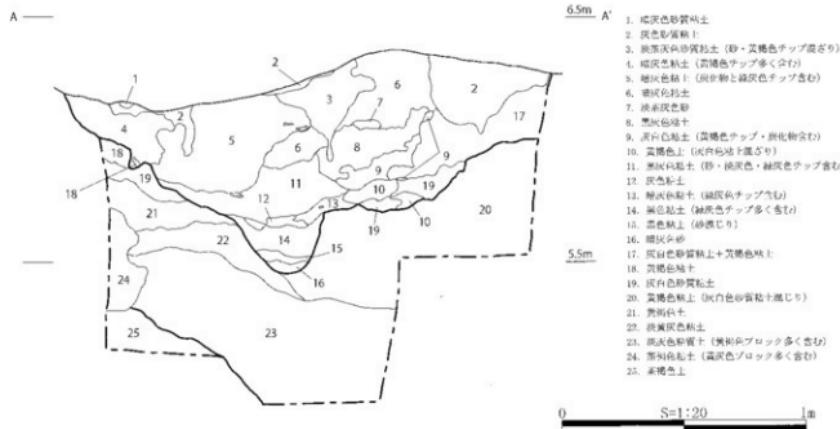
第5図 調査成果図 (左:造構配置図 右:等高線図) (S=1:250)



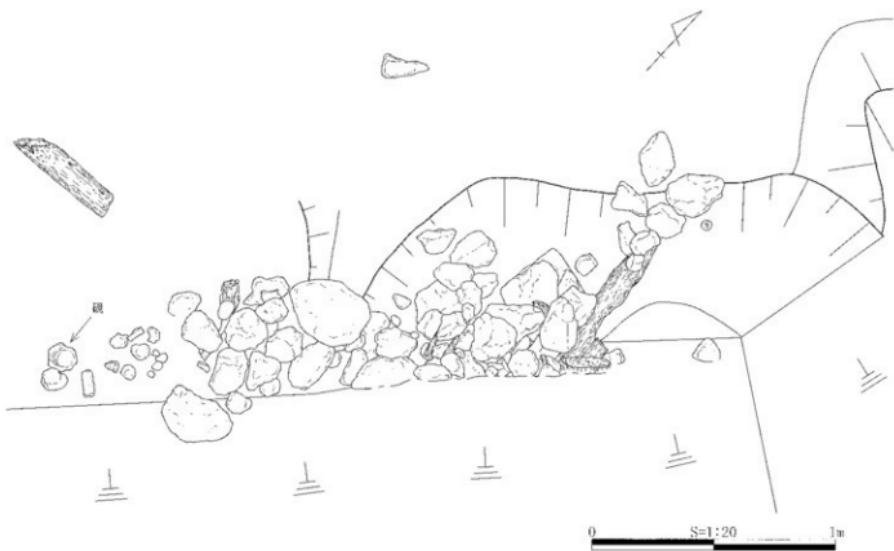
第6図 土層断面図 (S=1:40)



第7図 SD01遺物出土状況平面図 (S=1:20)



第8図 SD01土層断面図 (S=1:20)



第9図 SX02 平面図 (S=1:20)



第10図 SD04 遺物出土状況平面図 (S=1:20)

時期のものと考えられ、耕作等によりかく乱されたものであると考えれば、包含層は古代末から中世の比較的純粹な包含層であると思われる。遺物としては、白磁片、同安窯系青磁片、石鍋の鍔部分などがある。

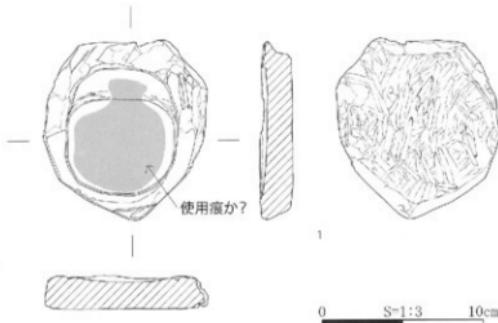
② SX01

調査区東端で検出されたもので、北東の山側に向かって下がる溝状のものであった。覆土上面から須恵器の小片などを多く含み、暗灰色系の粘土が厚く堆積していた。山側で調査区上端から2m近く落ち込む。人工の溝にしては掘り方がいびつで、覆土の堆積の様子も乱雑な層位であった。よって地滑りの痕跡であると想定し、酒井准教授にご指導頂いたところ、地滑りをした下端部に滑落した泥が盛り上がり、その後背部に窪地ができ池などになることがあるとのことであった。現状では北東側でどのようになるのか不明であるが、地滑りに関連した窪みである可能性が考えられる。遺物は須恵器小片が多いが、白磁片（玉縁状の口縁をもつ）もあり古代末以降に埋没したものと思われる。

③ SX02

調査区中央部の南側で検出された遺構で、古代末から中世の包含層である分厚い粘土を除去したところ、南北に軸をとる石組みが確認された。調査区外に遺構が伸びるため、その全貌を窺うには検出部分が少なすぎるが、南西に向かって下がるスロープの北西壁に、まず大小の丸太を寝かせ、杭（北側で1本検出した）で固定して、その上に人頭大の石を積んで壁の土固めとしているようである。

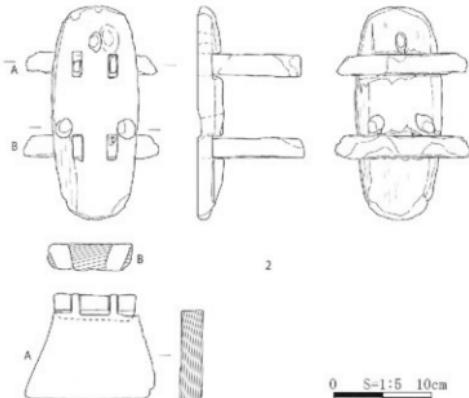
かなりの量の石がまだ調査区南側に延びているようであり、比較的大掛かりな造成物である可能性がある。遺物は石組みの中から木製品と鎧連弁文の入った青磁片（龍泉窯系）など、また、石組みのすぐ脇からは砥石と石製の硯（第11図-1）が出土している。硯は不整形な八角形状の外形を呈すもので、内面は梢円形である。石は黒色で、形を梢円にしようとした磨り切跡が観察でき、未完成かとも思われるが、内面底部はやや摩り窪んだような状態であり、石の自然面を残したまま使用した可能性もある。時期は不確定ではあるが、外形を梢円に仕上げようとしたものであるならば、12世紀から見られるものようである^{註134)}。



第11図 SX02 石製品（硯）実測図 (S=1:3)

④ SD02

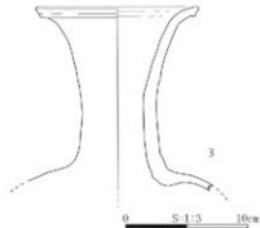
調査区中央から南西に向けて直線的に検出された遺構で、長さ7m、幅1.2m、深さ0.5mを測る断面は緩いカーブを描く浅い溝である。遺物は少ないがSD06との交差地点で下駄1点（第12図-2）が完形で出土している。長さ22.2cm、幅8.9cmを測る露卯の差歎下駄である。親指の痕跡と思われるくぼみが残る。下駄は5世紀に始まり古くは連歎下駄が主流であるが、露卯の差歎下駄は、12世紀以降に出土するようである。^{註10)}



第12図 SD02 木製品（下駄）実測図（S=1:5）

⑤ SD03

SD02同様の浅い溝で、長さ2m、深さ0.25mを測り、やはり調査区中央から西に向けて伸びていた。遺物は細片ばかりで数量も少ないが、SD02と同じ覆土と同じ面から掘り込まれているため、古代末以降の溝と思われる。



第13図 SD07 出土遺物(須恵器) (S=1:3)

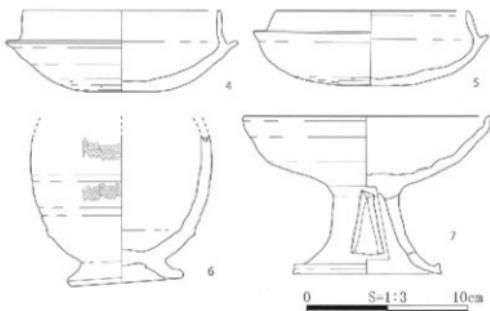
⑥ SD07

調査区西側で蛇行・分岐・合流する不規則な溝を検出した。溝の幅、深さも不均一で長さは10m、幅は0.5～1.5mを測り、水流によって地山が削られてできたものと考えられる。遺物は古墳時代のもの（第13図-3）も含むが、鎬連介文のある青磁の小片（龍泉窯系）も覆土から検出しておらず、中世以降に埋没したものと考えられる。

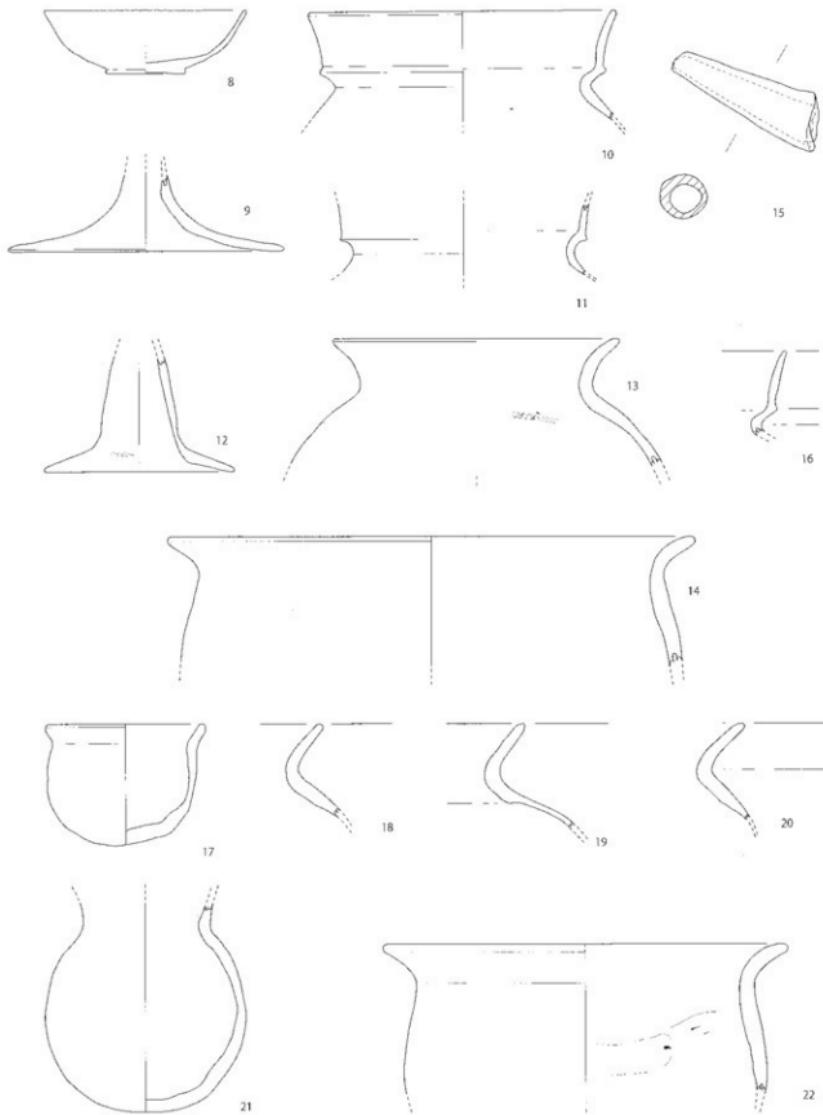
3 古墳時代後期

① SD01

調査区中央で検出した、長さ13m、幅2.0m、深さ1.2mの北東から南東に走るV字状の溝である。遺物も多く、おおよそ古墳時代のものと考えられる。検出当初は地滑りによる地山の亀裂部分かと想像していたが、酒井准教授により、溝の底面がわず



第14図 SD01 出土遺物(須恵器) (S=1:3)



第15図 SD01出土遺物(土師器) (S=1:3)

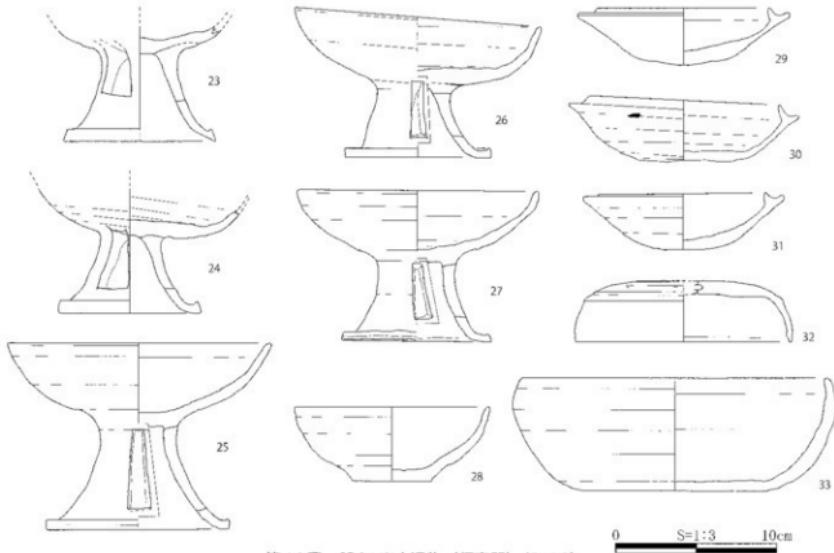
0 S-1:3 10cm

かではあるが平坦面であり、堆積土から水流があったことなどから、人工的に手を加えられた溝と考えるのが妥当であるとの指導を受けた。ただし、やや掘り方がいびつで、地滑りで出来た亀裂を人工的に整備した可能性を考えたい。土層観察からも、溝の落ち込みに沿って北側に傾斜する地山の層が観察できている（第8図）。埋土中からの出土遺物としては、弥生終末期～中世にかけての遺物がある。第14図4・5は須恵器坏身で復元口径12cm、器高5.0cm。5は復元口径11.8cm、器高4.6cmを測る。6は須恵器脚付塊と思われる。7は高坏で脚部に一段2方向の透かしを持つ。器高9.8cm、復元口径15.6cmを測る。8は復元口径12cm、器高3.9cmの土師質の高台付坏である。10は複合口縁の壺の口縁と思われる。13は単純口縁の土師器壺の口縁片で、復元口径17.2cmを測る。

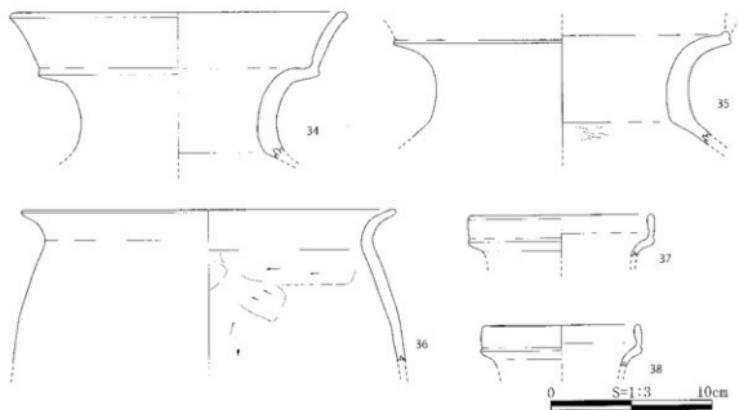
② SD04

SD01の南西端付近で屈曲してできたような溝である。ただ、断面がV字に近いSD01に比べかなり緩いU字状の断面を呈す溝であり、また、大量に土器が出土したため、別溝とした。遺物は古墳時代後期のものが多く、高坏、壺、罐などが一括で廃棄されている状態であった。なお、少量ではあるが弥生時代後期から古墳時代前期の遺物も出土しており、また、珪化木も1点出土している。

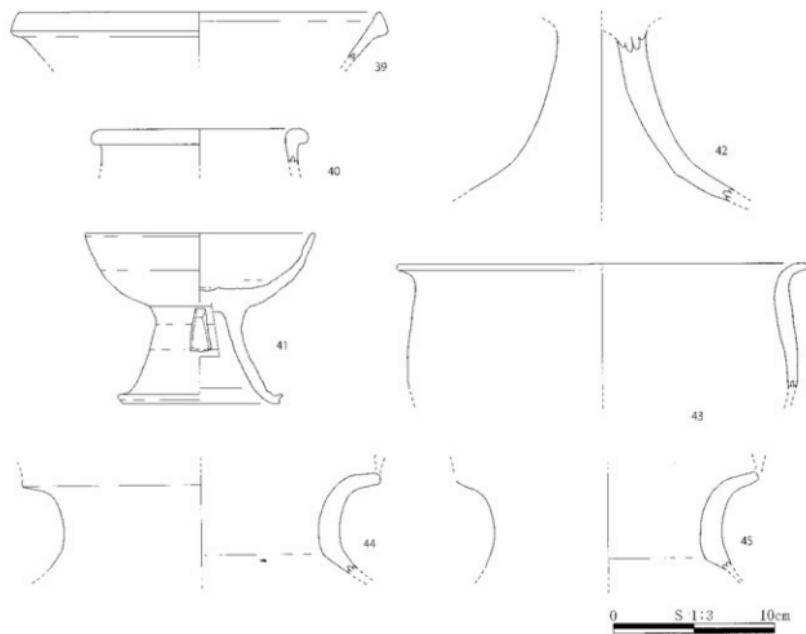
第16図の25はほぼ完形の高坏で、器高11.6cm、坏部口径11.2cmを測り、脚部に二方一段透か



第16図 SD04 出土遺物（須恵器）(S=1:3)



第17図 SD04出土遺物（土師器）(S=1:3)



第18図 旧耕作土中の出土遺物 (S=1:3)

しを穿つものである。23、24、26、27も須恵器の高坏である。26もほぼ完形の高坏であり、器高14.7cm、口径19cmを測るが、坏部と脚部の取付は焼成時に歪んでしまっている。29、30、31は坏身である。29は復元口径10.7cm、30は11.8cm、31は10.4cmを測るものである。32は口径13.2cmを測る須恵器坏蓋で、28は口径12.0cm、器高4.6cmの平底の須恵器坏である。33は復元口径18.6cm、器高6.9cmを測る須恵器の平底の碗である。

34～38は、SD04で検出された上師質の土器片のうち、大きさや器形の判別できたものを記載している。34は推定口径20.4cmを測る土師質の壺の口縁片であるが、胎土はやや粗く焼成も良くない。35も推定口径20.2cmを測る壺の破片である。36は推定口径22.9cmを測る広口の壺片と思われ、比較的肌理の細かい胎土でナデ調整が施されている。37および38は小型の壺の口縁片で、37は推定口径11.1cm、38は推定口径9.4cmを測る。

③ SD05

南東から北西に調査区を横断する断面U字状の溝で、長さ5m、幅1.5m、深さ0.25mを測りSD04と合流するようである。遺物は図化できるものは無かったがSD04とほぼ同時期のものと考えられ、並存した溝と思われる。

4 時期不明の遺構

① 西側ピット群（第5図）

調査区の西側平坦部で多数のピットが検出された。列状に並ぶものが多いが、調査区外に存在するのか対になるものが検出されず、建物跡を復元するには至っていない。

また、この調査区西側では造成上の盛土も薄く、後世の影響で出来たピットが混ざることも十分に考えられ、遺物もほとんどないため時期の特定は困難であると考える。

② 東側ピット群（第5図）

東側の平坦部分に直径10cm～40cm程度のピット群が確認できた。この平坦部は多少の削平を受けている可能性があることと、遺物が出土していないことから、西側同様建物の復元、時期の特定は出来なかった。

IV. 平成20年度調査

発掘調査場所は、全域が「布志名層」と呼ばれる軟弱な地層が広がる地滑り地域である（島根大学准教授酒井哲弥氏のご教示による）。平成19年度の調査では、遺物を含む溝を多数検出したが、この溝は、地滑りによって地割れが起こった場所、あるいは地滑りで滑った泥が堆積して形成されたV字形の谷地盤に堆積した軟らかい地層に、雨水等が流れ込んで調査地内に無数の流路を作ったものではないかとも考えられた。出土遺物の年代も、古墳時代後期から中世にいたる幅の広い時代のものであった。

平成20年度の調査は、この前年度調査地に隣接した既存の道路を隔てた北側の畠地を対象とした。現況は、梅林が放置されたままで他の雑木が繁茂した荒地となっていた。当初の地権者の話によると、以前はなだらかに傾斜する緩斜面であったので、これを畠地とするために山側を削り谷側に埋めて畠地を自分で造成したことであった。

平成20年7月の試掘調査で検出された遺物包含層は、現表土から約3m下で検出されていたが、調査初めの試掘トレンチで、途中の地層にも遺物を包含している層があるらしいことが観察されたので、慎重を期すため、東西13m、南北10mの範囲を人力で掘削した。

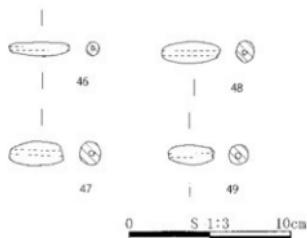
調査時期が冬場に当たり、山陰地方特有のめまぐるしく変わる天気に悩まされたが、調査が進み、遺物を包含する層が次第に特定され、最終的に3層の遺物包含層があることが判明した。道路拡幅工事の計画線に沿って北側に範囲を広げて調査を行ったが、その際には、表土下約1.5mまで重機で掘削し、作業の効率化と調査期間の短縮を図った。

1 遺物包含層

調査地内には、表層から径2m、深さ1.5mまで掘り込まれた現代のゴミ穴が3箇所にあり、掘削作業に支障をきたし、遺物包含層にも影響を与えた場所もあったが、旧表土と思われる層が、現在の表土（黒色土層=第1包含層）から2m下で、1層（暗～黒褐色粘性土層=第2包含層）検出され、さらに2.5～3m下でもう1層（暗褐色粘性土層=第3包含層）検出され、この二つの堆積層のみで遺物を包含しているのが確認された。

① 第1包含層

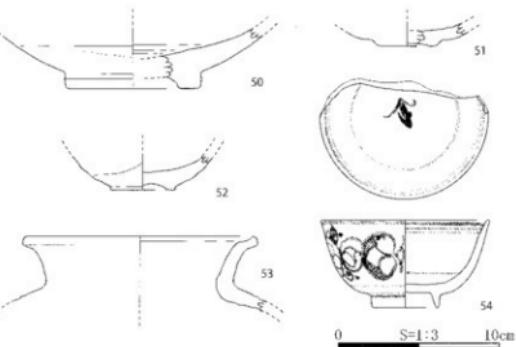
遺物を包含する第1の層、つまり現表土中には、プラスチック・ビニール・ガラス片に混じって、長さ2.8～3.7cm、幅0.1～1.4cm、孔径0.3cmほどの土錐（第19図-46～49）を数カ所で検出した。宍道湖は波がおだやかで、比較的漁のしやすい環境であり、投網、シバ漬（菜葉漬）などで^{註2}、こうした小型の土錐も近年まで使用されていたと考えられる。



第19図 第1包含層出土遺物（土錐）(S=1:3)

② 第2包含層（第20図）

第2の包含層は、表土下1.5m前後から検出され、主として土師質の土器の細片が多く認められたが、唐津焼片（第20図-51、52）のほか、肥前系の磁器片（54）も見られる。



③ 第3包含層（第21～22図）

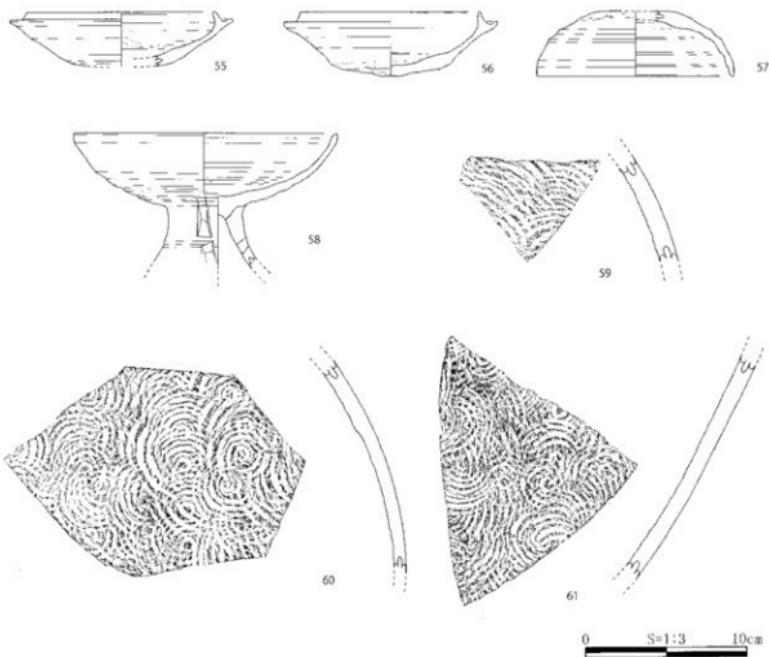
最下層の第3の遺物包含層は、須恵器では大甕の破片（59～61）、坏身（55、56）、坏蓋（57）、高坏（58）があった。土師器片では甕片（62～64）・甕の一部と思われる把手（65～67）、高坏片（58）があった。また、紡錘車（68）も検出した。

55は須恵器の坏身で、復元口径11.6cm、器高3.3cmを測る。56も同じく須恵器の坏身で、復元口径11.0cm、器高3.9cmを測る。57は須恵器の坏蓋で、復元口径12.0cm、器高4.0cmを測る。58は須恵器高坏で、坏部口径最大8.4cmを測り、脚部は二方二段透しを施すものである。68は土製の紡錘車で、上面直径3.3cm、下面直径5.5cm、高さ2.4cmを測るものである。65～67は土師器の把手である。59～61は須恵器の甕片である。この他に土師質の高坏片や器台と思われるもの、あるいは須恵器の糸切り底の腕と思われる小片もあり、時期的には古墳時代～8世紀に及び、かなりの幅が見られる。

2 地山面

地山面は、北側で表土下0.3m（標高11.5m）で検出されたが、南側では表土下3.5m（標高9.0m）に至るも、なお検出出来なかった。平成19年度の調査地の北側で観察された地山の標高が約8.5mであることから、地形的には、ほぼ連続して段状に下降していくものと推察される。調査地西北角では溝状の地形も観察されたが、自然の伏流水の流路と思われた。

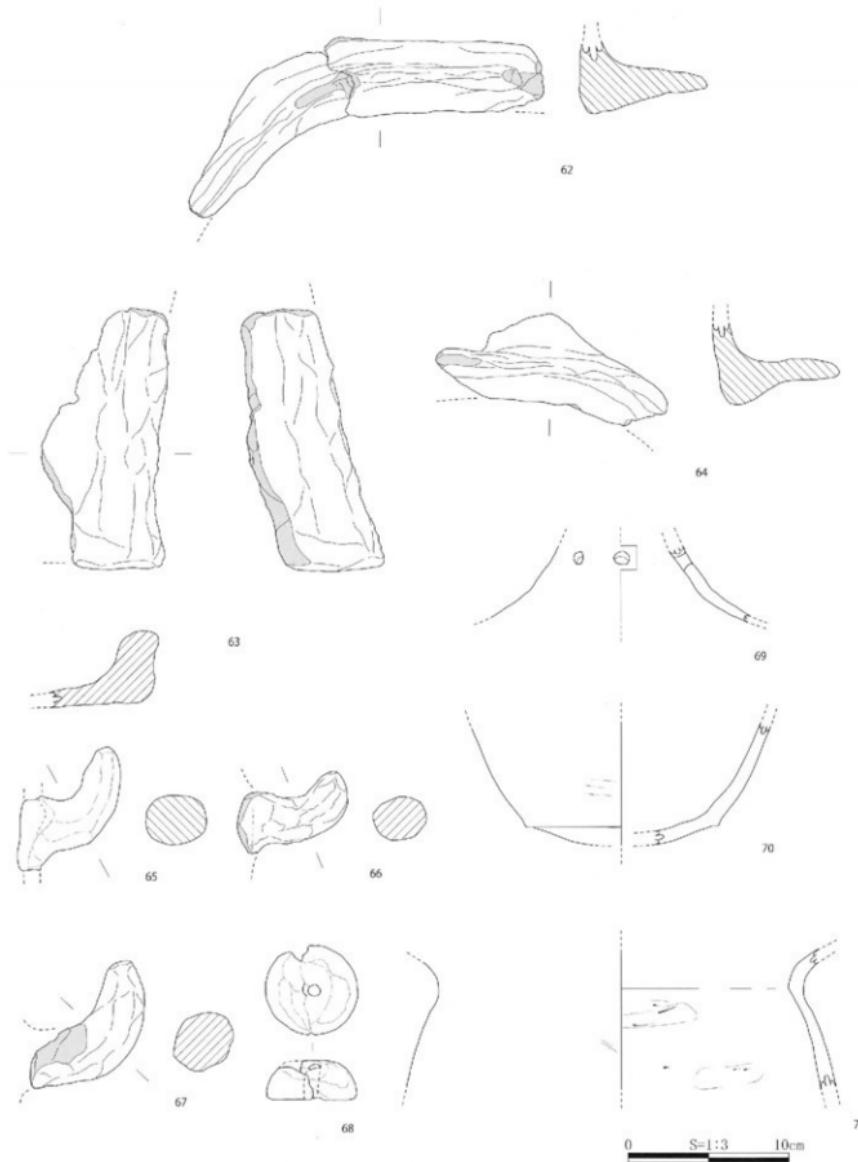
地山面や溝内に遺物は皆無であり、従って、段状の地形も人為的に加工されたものではなく、地滑りによるものや、自然の流水による単なる地形的な変化と考えている。



第21図 第3包含層出土遺物（須恵器）(S=1:3)

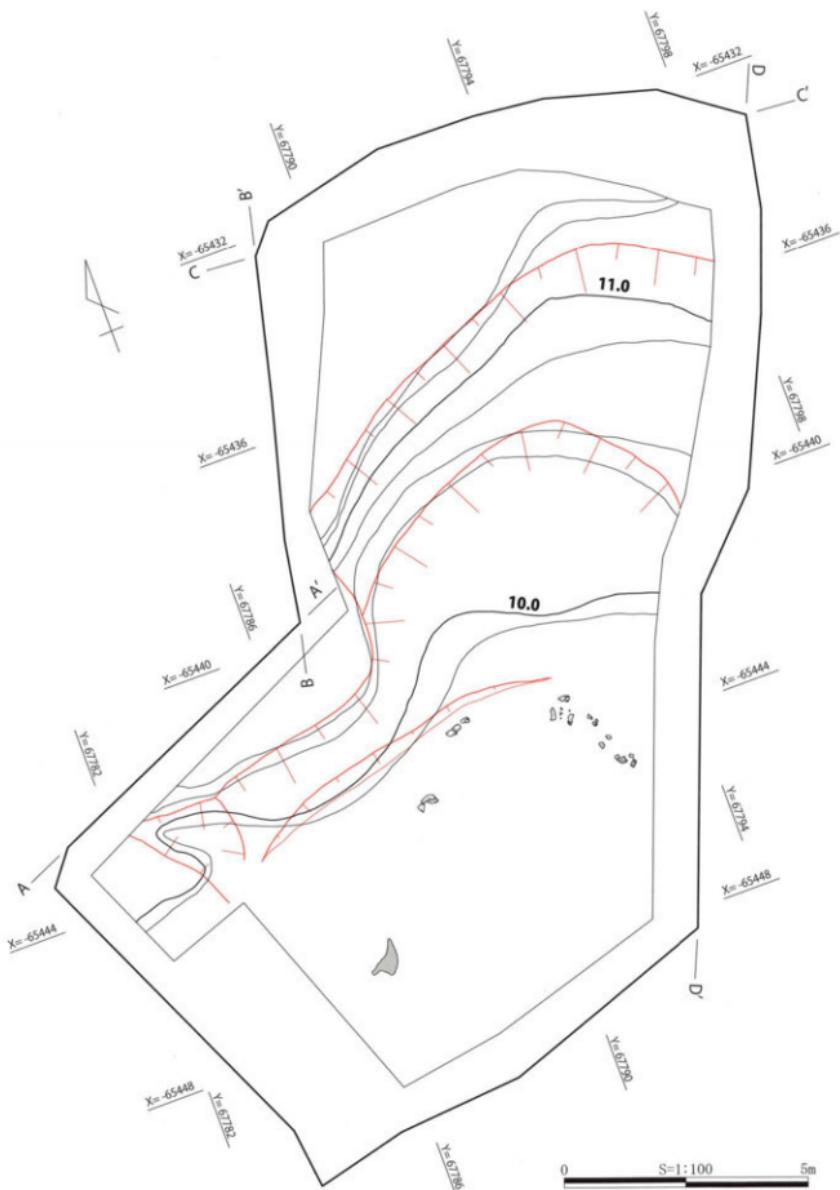
註

- (1) 『江戸考古学研究事典』(2001)
- (2) 『穴道の漁具、漁法』穴道町教育委員会 (1989)
- (3) 水野和雄「日本石硯考」考古学雑誌第70巻第4号 (1985)
- (4) 原田倫子「中国地方における中世遺跡出土の硯」古文化談叢第53号 (2005)



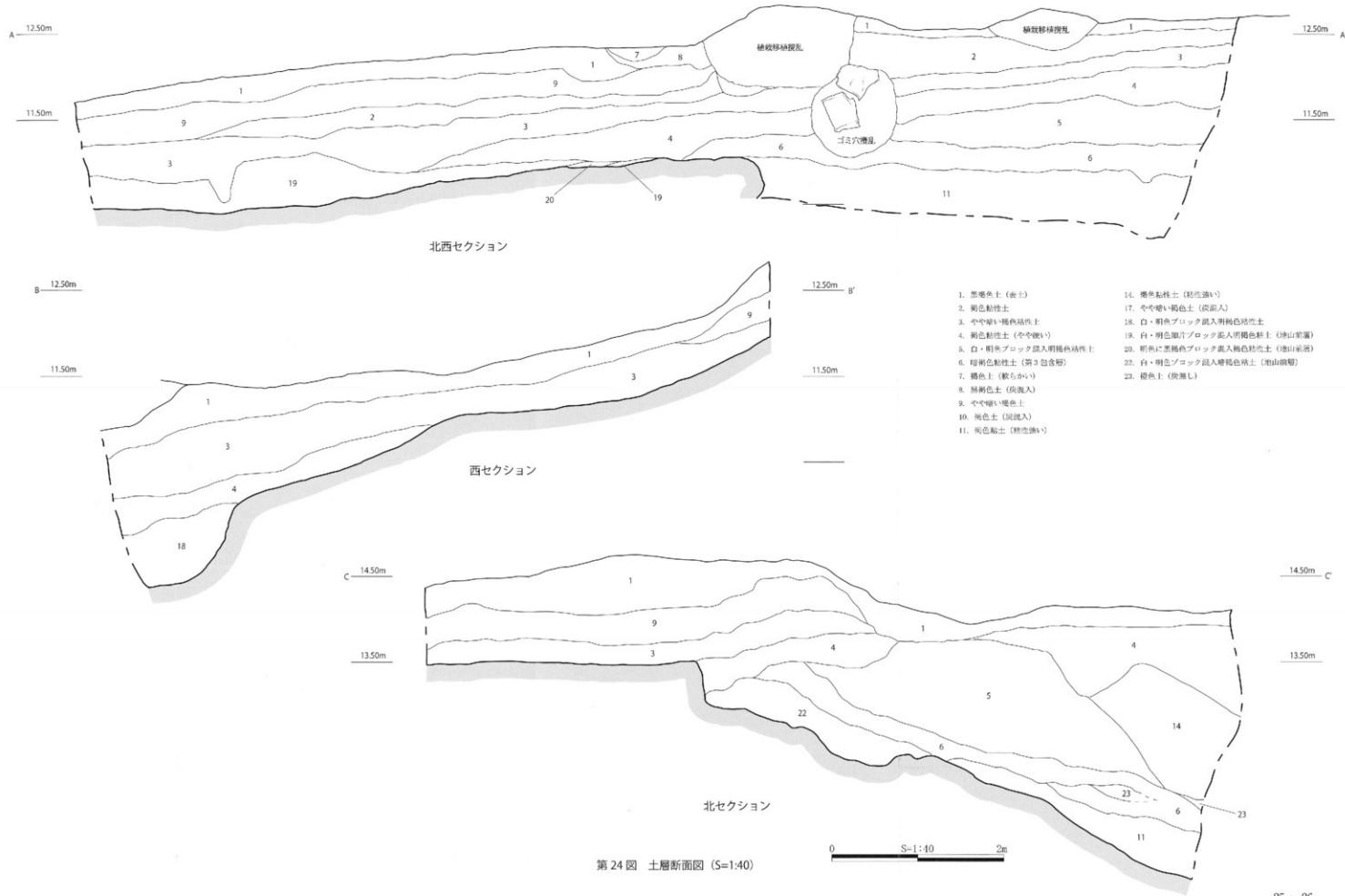
第22図 第3包含層出土遺物(土師器) (S=1:3)

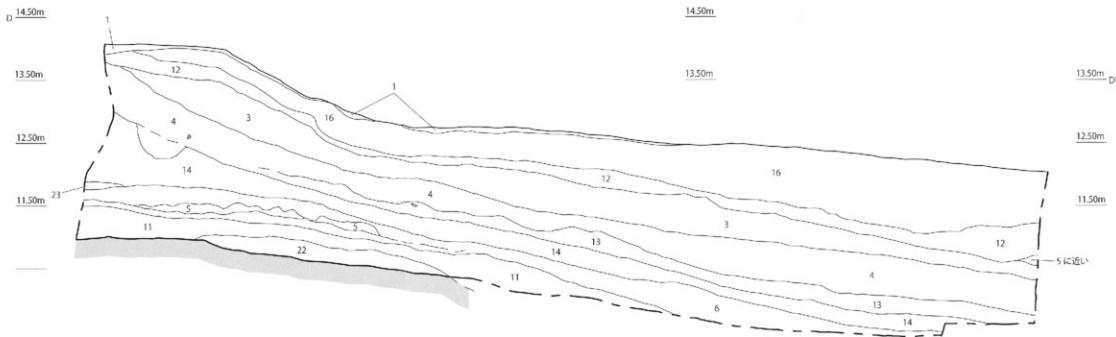
0 S=1:3 10cm



第23図 調査成果図 (S=1:100)







- 1. 黒褐色土(表土)
- 2. 灰~暗灰褐色粘土
- 4. 極白色粘土(中等硬)
- 5. 白・明色ブロック混入の極白色粘土
- 6. 暗褐色粘土(第3包含層)
- 8. 黄褐色粘土(粘性強)
- 11. 黑色土(弱・包括層)
- 12. 黑色土(弱・包括層)
- 13. 緑~墨褐色粘土(第2包含層)
- 14. 棕色粘土(粘性強)
- 16. 黑色土(根・土苔・枯土等混入の堆土)
- 22. 白・明色ブロック混入の極白色粘土(地山崩廻)

0 S=1:60 3m

第25図 土層断面図 (S=1:60)

V. 小結

平成19年度調査では、能登堀遺跡の範囲の広がりと遺跡の内容を確認することが出来た。時期的には古代末から中世、古墳時代後期の2時期に遺物のピークがあり、当時の人々がその時に活発に当地で活動していたことを物語っている。特に古代末から中世にかけての遺物として中国製の輸入磁器が出土したことと合わせて、発見例の少ない中世の石製硯が出土したことは、この付近に文字の書ける有識者がいた可能性を示唆する。また、調査地南側の緩斜面にあると考えられる能登堀遺跡の中核部分の様相を、そこからの流入と考えられる包含層出土遺物の様子から伺うこともできた。古墳時代後期には集中的に土器が廃棄された溝状遺構が検出された。あるいは祭祀跡の可能性もあるが^註、今後の類例の増加に期待したい。ただ、地滑り地帯という特殊な立地条件が遺構の理解を困難にしたこともあり、溝状遺構の切り合い等が確認できなかった。

平成20年調査地は、平成19年度調査で検出されたV字地形の谷上部の起点に当たる地点と考えられるが、地滑りが激しく、また、検出された地山面には遺構・遺物は皆無であり、そのほかの場所でも生活の痕跡を検出することは出来なかった。しかし、遺物包含層が数層検出されたことから、近傍に主たる生活の場が存在したことを伺わせる。

平成19～20年に至る2カ年の調査によって、能登堀遺跡の範囲の北限がほぼ確認された。出土遺物の状況からは、古墳時代から中世にいたる長い期間に、幾度か近傍で活発な生活が営まれていたことを確認することが出来た。今後の調査においても貴重な史料となるものである。

註 野津旭「水辺の祭祀跡（奥出雲円満寺遺跡）」『八雲立つ風土記の丘』No183（2005）

遺物觀察表

写 真 図 版



調査地全景（西から）



調査地全景（北東から）

図版2 平成19年度調査



調査中の状況（西から）



SD08・09 検出状況



P1・P2 検出状況



東側ピット群検出状況（南から）

図版4 平成19年度調査



SD01 覆土上面遺物出土状況



3区包含層遺物検出状況（南から）



C・D 土層断面 (東から)



3区溝状遺構 (SD01～SD05) 検出状況 (西から)

図版6 平成19年度調査



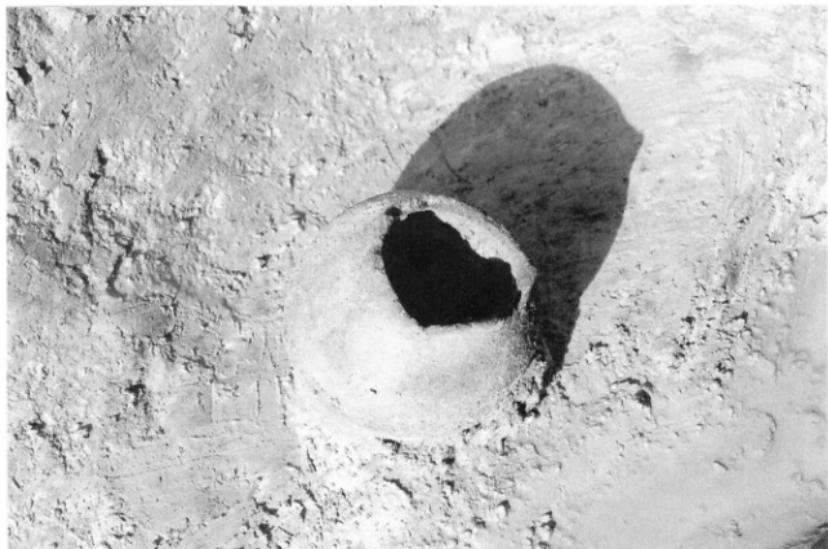
3区 SD01～SD05 完掘状況（西から）



SD01 土層断面



SD01 遺物出土状況（西から）

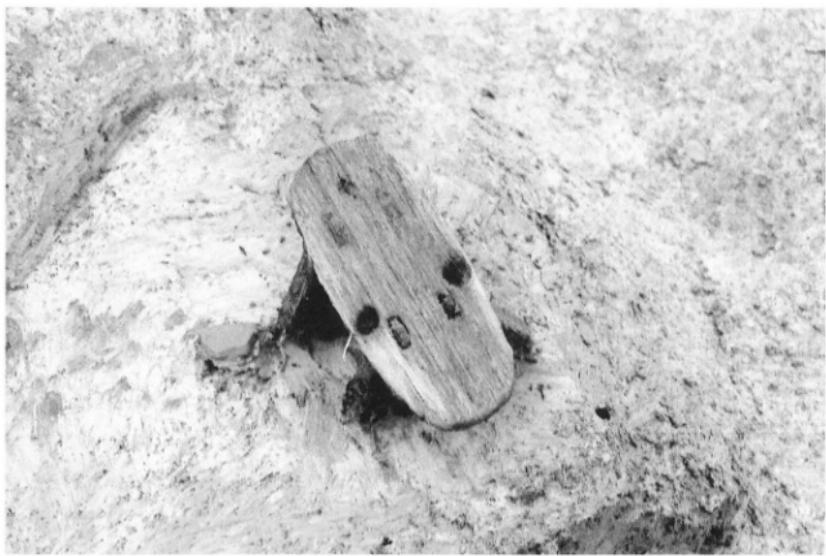


SD01 遺物出土状況（南から）

図版8 平成19年度調査



SD01 遺物出土状況（北から）



SD02 遺物出土状況（北から）



SD04 遺物出土状況（北から）



SD04 遺物出土状況（東から）

図版 10 平成 19 年度調査



SD07 遺物出土状況（北から）



SX02 検出状況（北から）

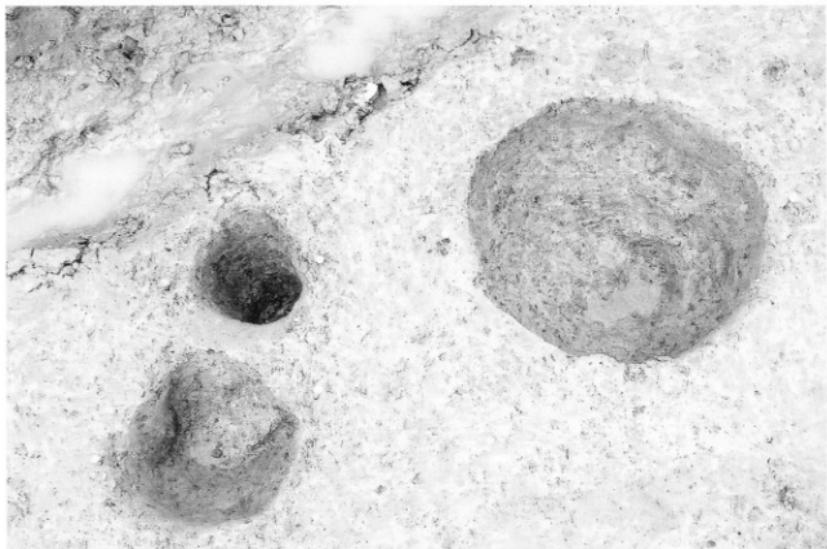


SX02 遺物出土状況



西側ピット群検出状況（北から）

図版 12 平成 19 年度調査



西側ピット群完掘状況（南から）



調査後全景（西から）



調査地遠景（南西から）



調査地近景（南東から）

図版 14 平成 20 年度調査



調査中の状況（南東から）



調査中の状況（北東から）



遺物包含層検出状況（南から）

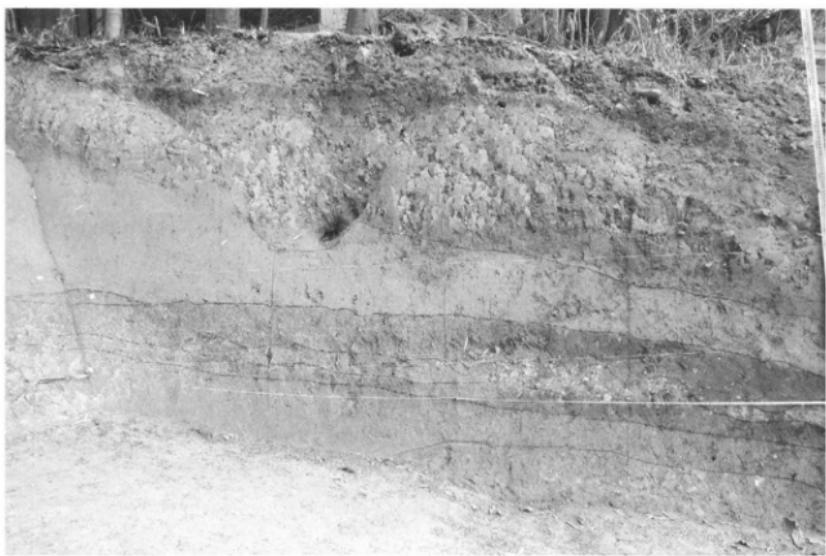


地山面の状況（北面）

図版 16 平成 20 年度調査



地山面と遺物包含層（北面）



第 3 包含層の状況（北面）



遺物の出土状況（東から）



壺片の出土状況（東から）

図版 18 平成 20 年度調査



調査終了時の状況（南西から）



調査終了時の状況（北東から）



調査終了時の状況（西から）

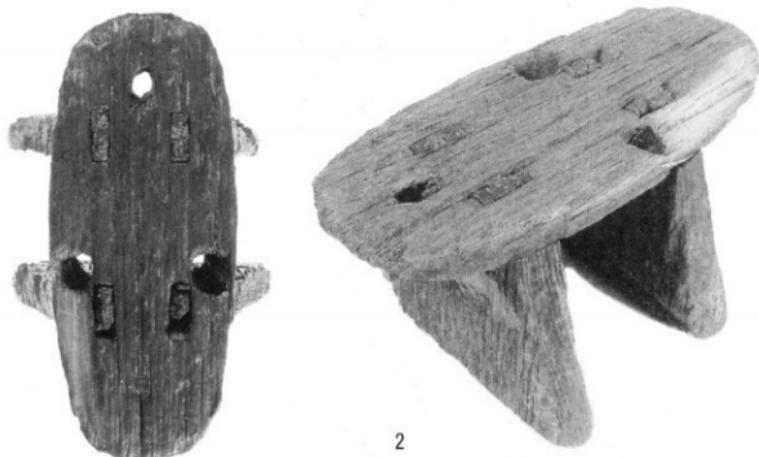


調査終了時の状況（北から）

図版 20



1

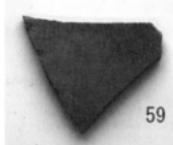
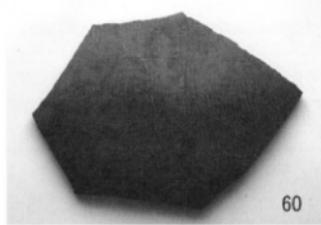
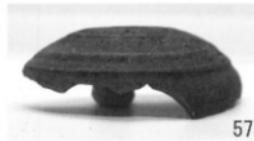
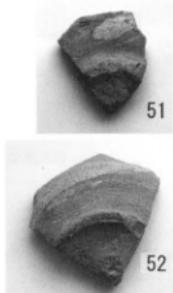
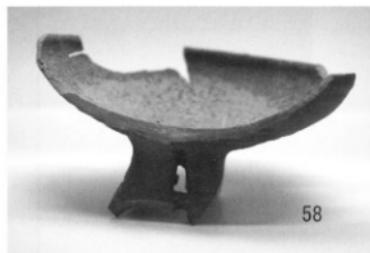
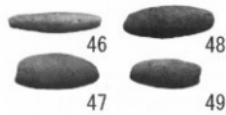


2



図版 22





報 告 書 抄 錄

フリガナ	トシケイカクドウロシングチュウオウセンドウロカイリョウジギョウニトモナウノトボリイセキハックツチョウサホウコタショ								
書名	都市計画道路穴道中央線道路改良事業に伴う能登堀遺跡発掘調査報告書								
副書名									
卷次									
シリーズ名	松江市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第126集								
編集者名	中尾 秀信								
編集機関	松江市教育委員会								
	財団法人松江市教育文化振興事業団								
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL 0852 (55) 5284								
	〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1番地 TEL 0852 (85) 9210								
発行年月日	2009年7月31日								
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積		
		市町村	遺跡番号						
能登堀遺跡	島根県 松江市 穴道町	32201	169	35°24'27"	139°54'48"	2007.09.01 ～ 2007.12.28	570m ²		
						2008.12.15 ～ 2009.03.16	210m ²		
所取遺跡名	各種別	主な時代		主な遺構		主な遺物			
能登堀遺跡	散布地	古墳時代		溝状遺構		土器器			
		中世～近世		石組遺構		須恵器 木製品・土製品 陶磁器・硯			

都市計画道路穴道中央線道路改良事業に伴う
能登堀遺跡発掘調査報告書

2009年8月

発行 松江市教育委員会
財團法人松江市教育文化振興事業団
印刷 (有)高浜印刷
島根県松江市東長江町 902-57